

---

# 九歳児のカレー論

仙人掌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

九歳児のカレー論

### 【Nコード】

N4073K

### 【作者名】

仙人掌

### 【あらすじ】

カレーマスターの九歳児が最高のカレーに出会う話。九歳児です。

「ほら、ちゃんといただきますしなさい」

「いただきます」

本当ならもうすぐ仕事から帰ってくる父上を待つべきだが、お腹が減って仕方ないので先に夕食を頂くことにした。

小学生も仕事で忙しいのだ。<sup>あそび</sup>

フ、最近のがきんちよでも遊びに対する情熱はいつの時代も変わらないらしいな。

付き合うのにも骨が折れる。

ん？

ああその通り私もまだ九歳児だが。

周りの奴らとは精神年齢が違うのだ！

そういえば私が秘密基地を作って以来、皆それにのめりこんでP S Pやマンガを持ち込んでいる。

まあどうしても、というのなら貸してやらんほど私の器は狭くない。べ、別に褒められたりおだてられたワケでは断じて無い！

私の心が広がっただけだ！！

「ちょっと今日のご飯不味かった？」

「いや、全然そんなことない」

床に着かない足をぶらぶらさせて思考に耽っていたら、いつの間にか箸が止まっていた様だ。

クソ、私の身長が小さいのではなくこの椅子が高すぎるのだ！

しかし今日の私は機嫌が良い。  
特別に許してやろう、デクのぼーなデカいす。

なにせ本日のメニューはカレーだ！

カレーだ、カレーなのだ！

私のこの世の星の数ほどある料理の中で最も好きなカレーだ！！  
カレーに関して私が引けを取るのは某ひぐ○しの田舎学校の某教師  
や、某ゲームの埋葬機関の某先輩ぐらいものである。

あ、そこ、何で九歳児がそんなこと知ってんだとか言わない様に。  
本道のインドとジャパニーズ・カリライスの違いは大きい。

しかしそれは日本のアレンジャーとしての力を示しているのではな  
かるうか。

ただ良いモノを吸収だけでなく、取り入れたものを更なる高みへと  
昇華する力をこの国は持っているのだ。

「パパ、傘忘れちゃったんだって。ちょっとママ迎えに行つて来る  
ね」

「ふむ、道中には気をつけるのだぞ」

「はいはい。じゃあ行つて来ます」

ケータイを片手でパタンとたたみ、上着を着て傘を二本持ち母上は  
出かけていった。

あの田舎駅にはテイクアウト可の透明な傘も無ければ、コンビニな  
ど気の効いたものも無い。

父上も一時間に二本しか電車が無いのは辛いと言っていたな。

さあ、人類の秘宝とでも言うべきこのカレーを冷ましてしまうのは、  
欲しいカードの為にパックを何十も買いあさるようにもつたない。

ノーマルとかはシングルで買うべきだ。  
閑話休題。

無駄な思索に走りたがる気持ちを切り替えるか。

「改めて……いただきます」

キャラクターの絵が描かれない加減買い換えたいスプーンを握り、一口目をすくう。

今日のカレーはいつものと趣きが少々異なるようだ。

新調理法？

どれ……

「ッ！」

カレー愛好家の偉大なる女神二人に抱擁される感覚を掴む。

無論、妄想。

何かカレーっぽい辛さは無いが、美味い。

カレー界の織田信長や！と某有名人っぽく叫びたくもなる味だ。

「よし……次はジャガイモだ」

ジャガイモはカレーにおいては非常に重要なポジションを占めている。

辛さの抑制機関であり、ライスに続く第二の炭水化物と言っても過言でなからう。

更に肉のように高価でもないのでケチられる対象にならない。

「これは……よいものだ」

流石に母上、芯の部分が硬いといった初歩的ミスはないな。

しかも無駄な思考に耽ったせいか、程よく熱さが抜けていて食べやすい。

評論する間もなく口の中から消えてしまった。

「そしてニンジン」

サラダに入っているのは苦手でも、カレーに入っていれば全く気にならないという方もいるだろう。

見た目の上でもアクセントとなる紅き秘宝を咀嚼する。

「甘いッ！これが妙に辛さが無いせいでいつもよりも甘さが際立っている！」

おっとつい興奮して声に出してしまった。

自重するのだ。

カレーヤー（？）としてゆっくりとこのすばらしい芸術品を楽しまねば。

しかし・・・

「美味しい・・・美味すぎるッ！」

箸、もといスプーンを自らの意志で止めることができない。

まるで自分の腕ではないように動く。

魂がこのカレーを求めているのだ。

影に織り交ぜられたナス、カレーの引き立て役に徹するブロッコリー、根幹となるライス。

全てが絡み合い最高の美味が完成している。

芸術だ、天才だ、風雲児だ、最高だ！

これを褒める言葉など、今なら口からとどまることを知らない大河

のようにあふれ出てくる。

いや、ここまで神格化したものを言葉で表現するのは侮辱に当たるかもしれない。

味わうためでなく、伝えるためでもなく、ただただ感じるのみだ！

「ふう・・・」

気づけば私を皿を洗う必要がなくなるというほどに、貪欲に喰らい尽くしていた。

これまでのカレーと全く違う辛さではない何かがあった。

カレーというには邪道かもしれない。

だがしかし、これが生きてきた九年間で最高のカレーだったことは認めざるを得ない！

まだ余韻が体に残っている。

何となく叫びだしたくなった。

「ごちそうさま、だ！」

ガチャリ

母上と父上が帰ってきたようだ。

危ない危ない、親に精神異常者として見られたら大分傷つく。

「ただいま」

「ただいま。ママ、今日はカレーかい？」

「ビーフシチューよ。あなたの鼻はどうなってるのよ、まったくもう・・・」

パリーン！

床に落ちた皿と共に、自分の中の何かが崩れていく音が聞こえた。



（後書き）

実は私はビーフシチューほとんど食べたこと無いっという・・・誤字報告や小説の感想、ビーフシチューの感想でも歓迎しております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4073k/>

---

九歳児のカレー論

2010年11月5日16時31分発行